

えつらんしつ

- 読書空間の対象化 -

1913239 須藤寛天

構 想

情報化社会に加え、コロナ禍により、非接触・均質化が進んだ。

そんな中、図書館に求められているものは、存在感や雰囲気のような気がした。

複合により、市民権を得てきた昨今の図書館とは異なり、閲覧室の対象化により、現状の渴きや

飢えを満たす図書館があっても良いような気がした。

そこで、本計画では図書館の一つの機能である閲覧を対象化することで、失われつつある情報の

雰囲気の復興を目指した。

背景

情報伝達の手段は、口述→記述へと進化してきた。

その結果、情報は地域軸・時間軸から離れ、さまざまな時代のさまざまな場所に伝播可能となった。

現在、記述の多くは、筆記からタイピングへと移行した。

また媒体は、自然物や紙面からコンピュータの画面へと変化している。

その結果、情報の持っていた、物理的な重さは、コンピュータの物理的な重さに還元された。

高度に情報化した現代において、かつて情報の持っていた場所性や、テクスチャは失われているのではないか。

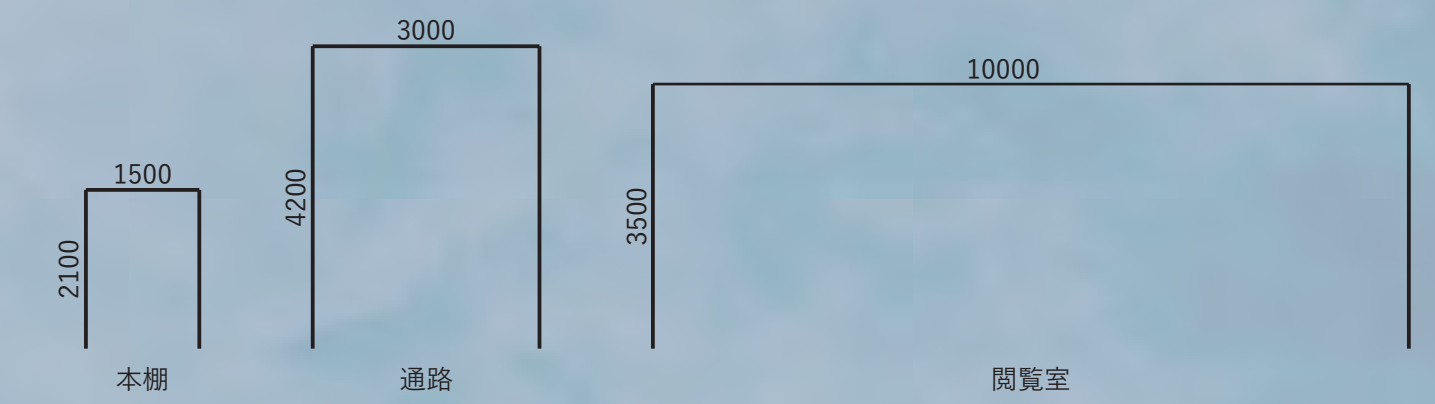
こうした時代において、図書館の情報を蓄積・伝播するという基本的なシステムをその場固有の質感とともに提供するべきではないかと考えた。

方法

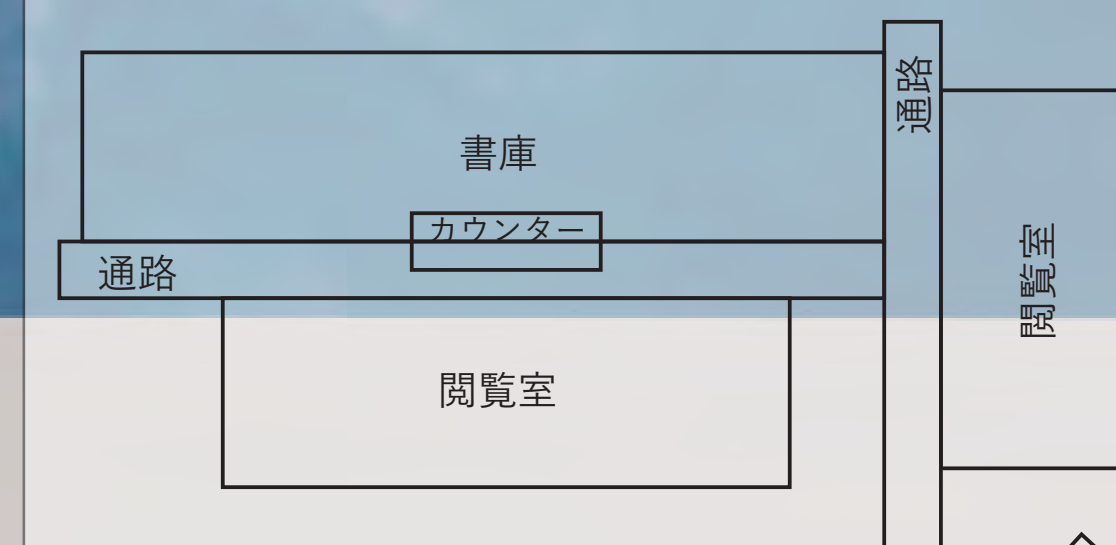
著者が対象化した世界を体験することは、読書の重要な側面と言っても良いだろう。著者の世界の切り取り方を真似て、実世界を見た時の、発見や感動は読書を通して得られる楽しさの一つだ。

そこで、読書体験＝閲覧室を対象化し、フレーミングにより構成することで、空間に読書で得られるような発見や感動を付与することができるのではないかと考えた。

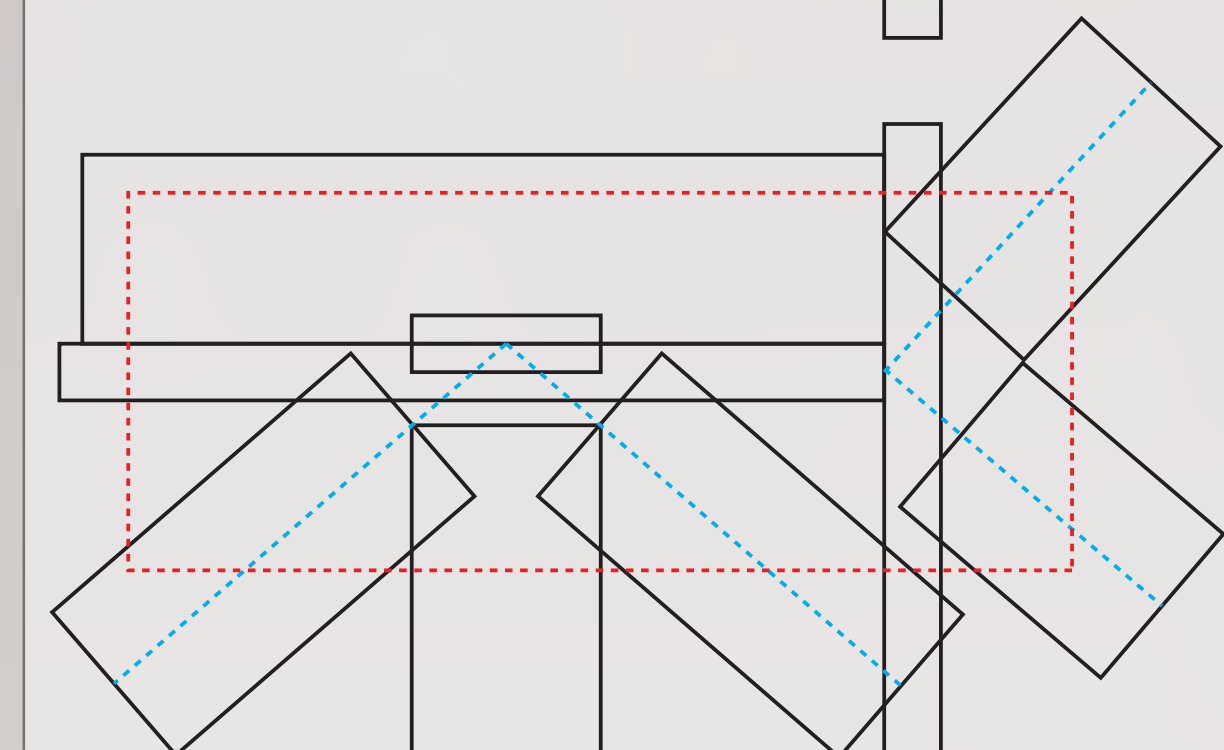
フレームの種類



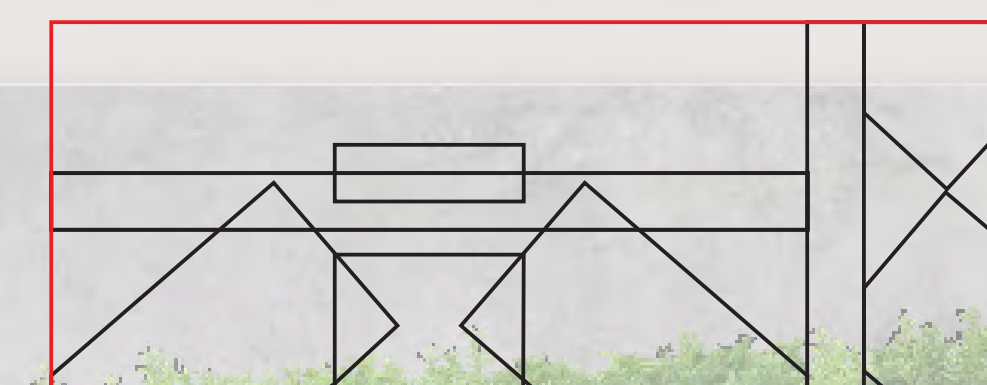
ダイアグラム



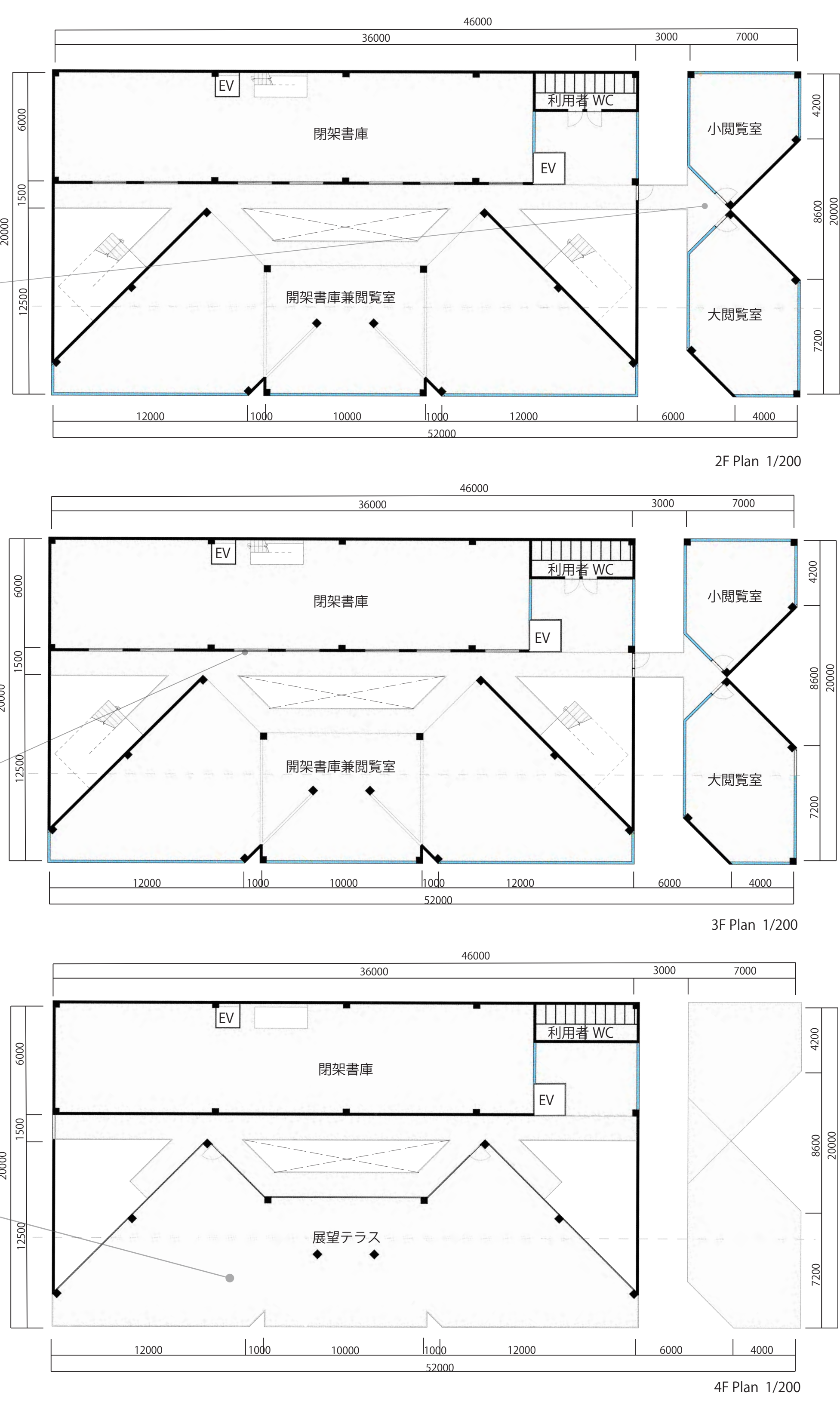
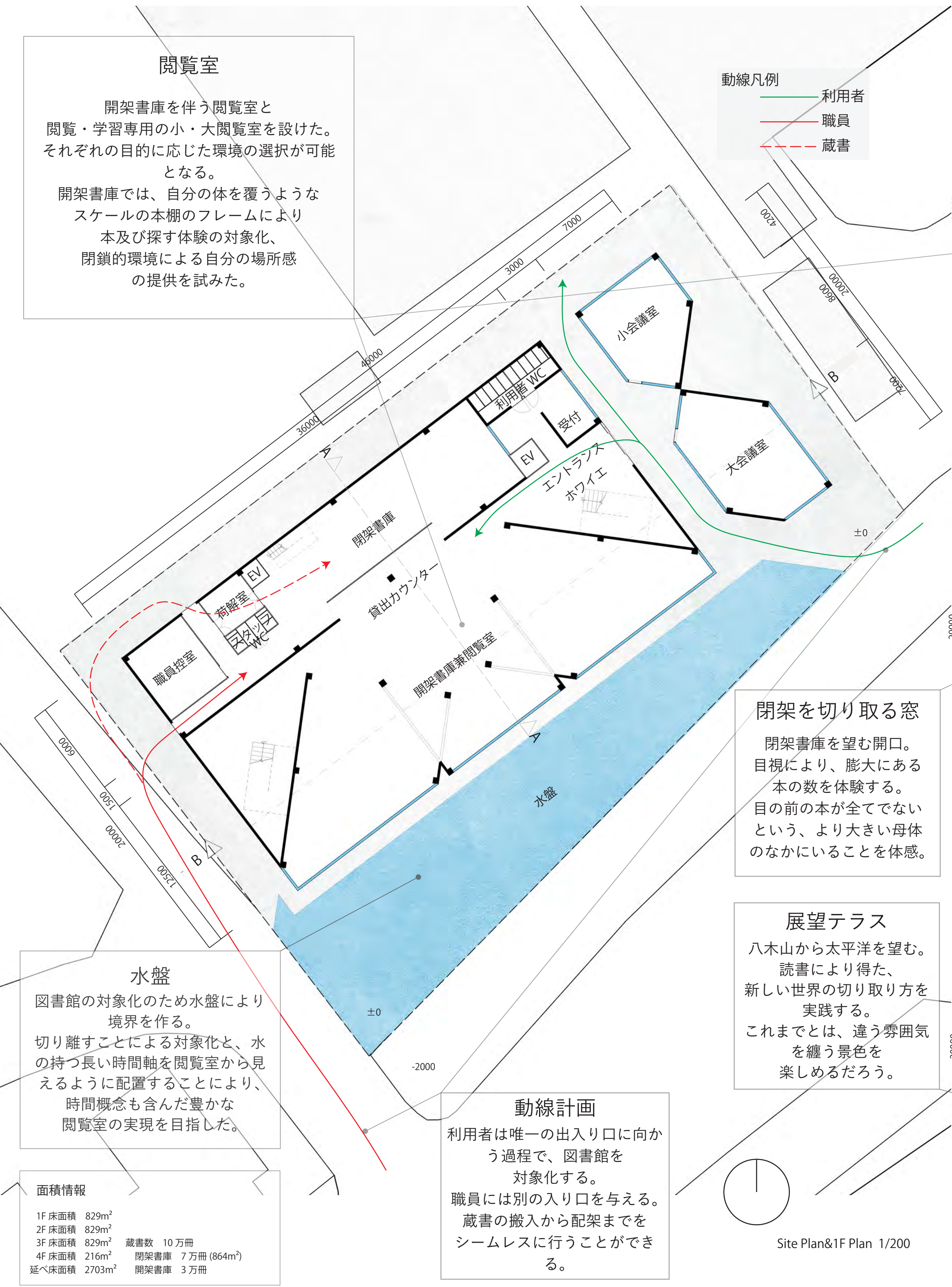
①
書庫・閲覧室・通路・カウンターに対して。それぞれ、適当な面積を与える。
それらを、動線計画に注意して配置する。



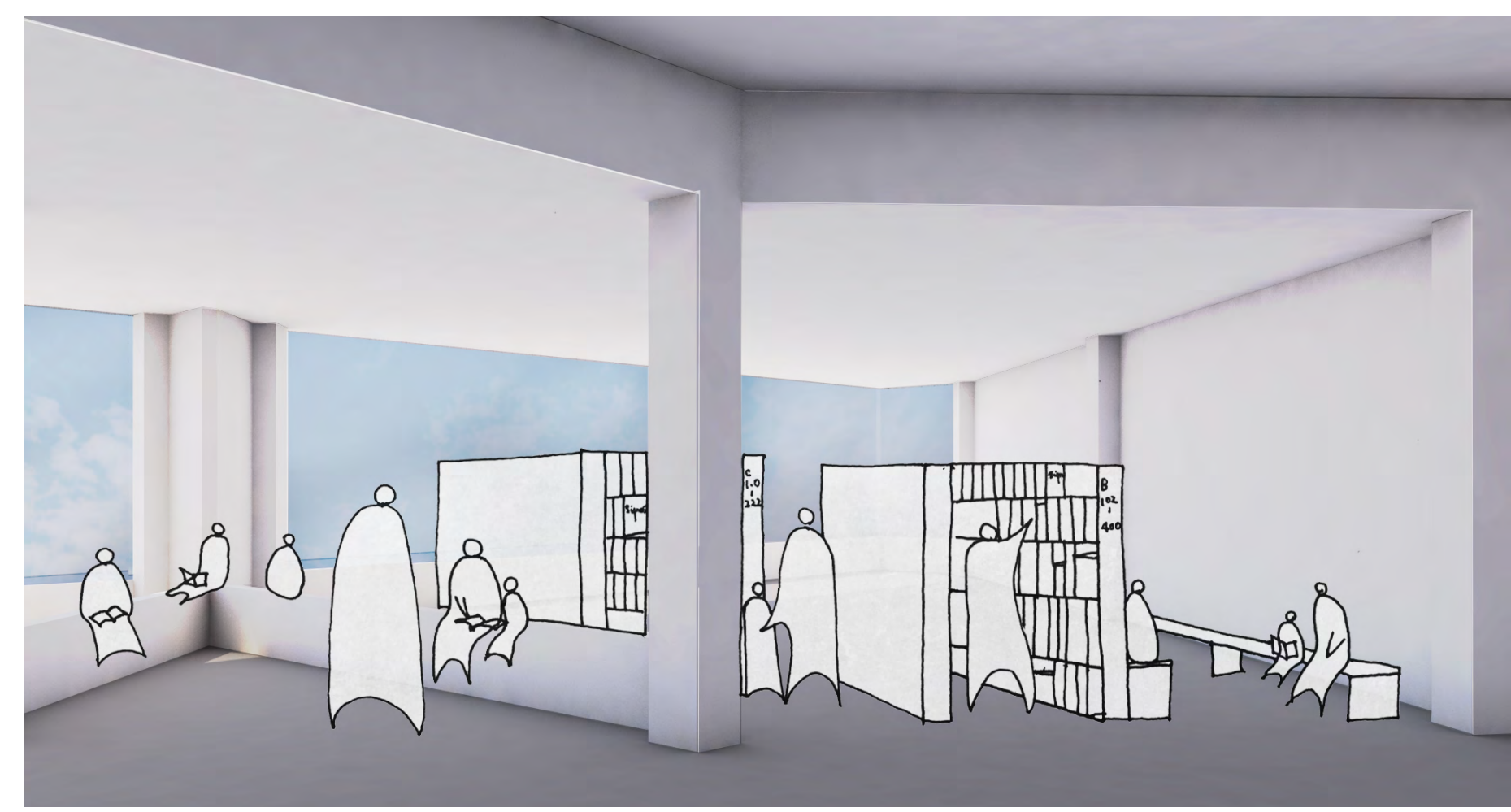
②
書庫をカウンターに対して、視線が通るように傾ける。
また、用途地域から建蔽率 60% の規制から、面積 960m² となる長方形を設定する。



③
②の設定に対して、はみ出ている部分を切り落とし、床面を形成する。



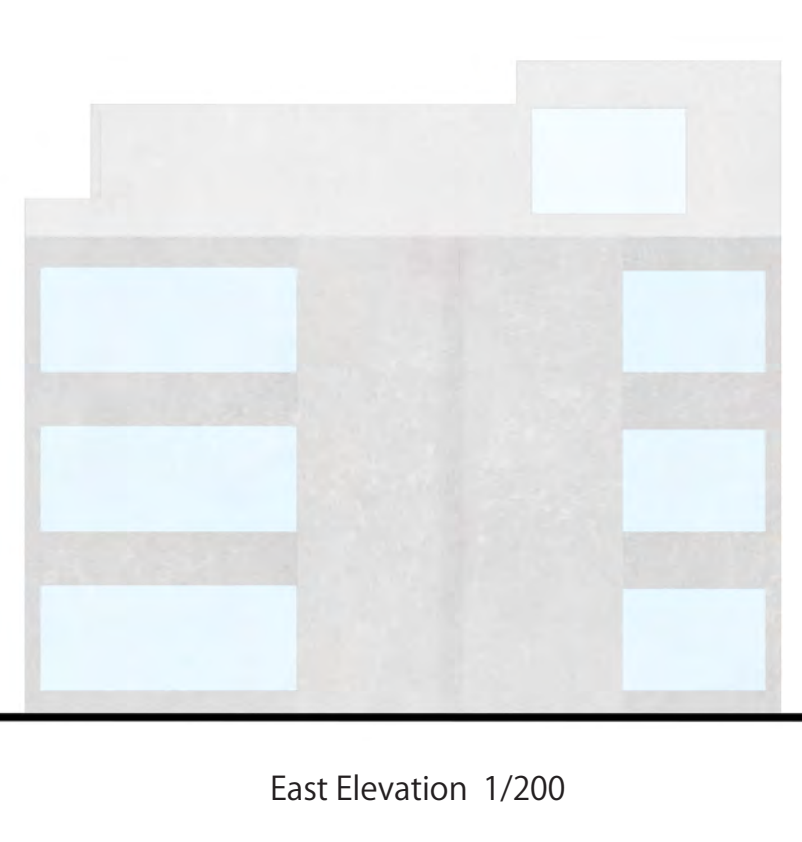
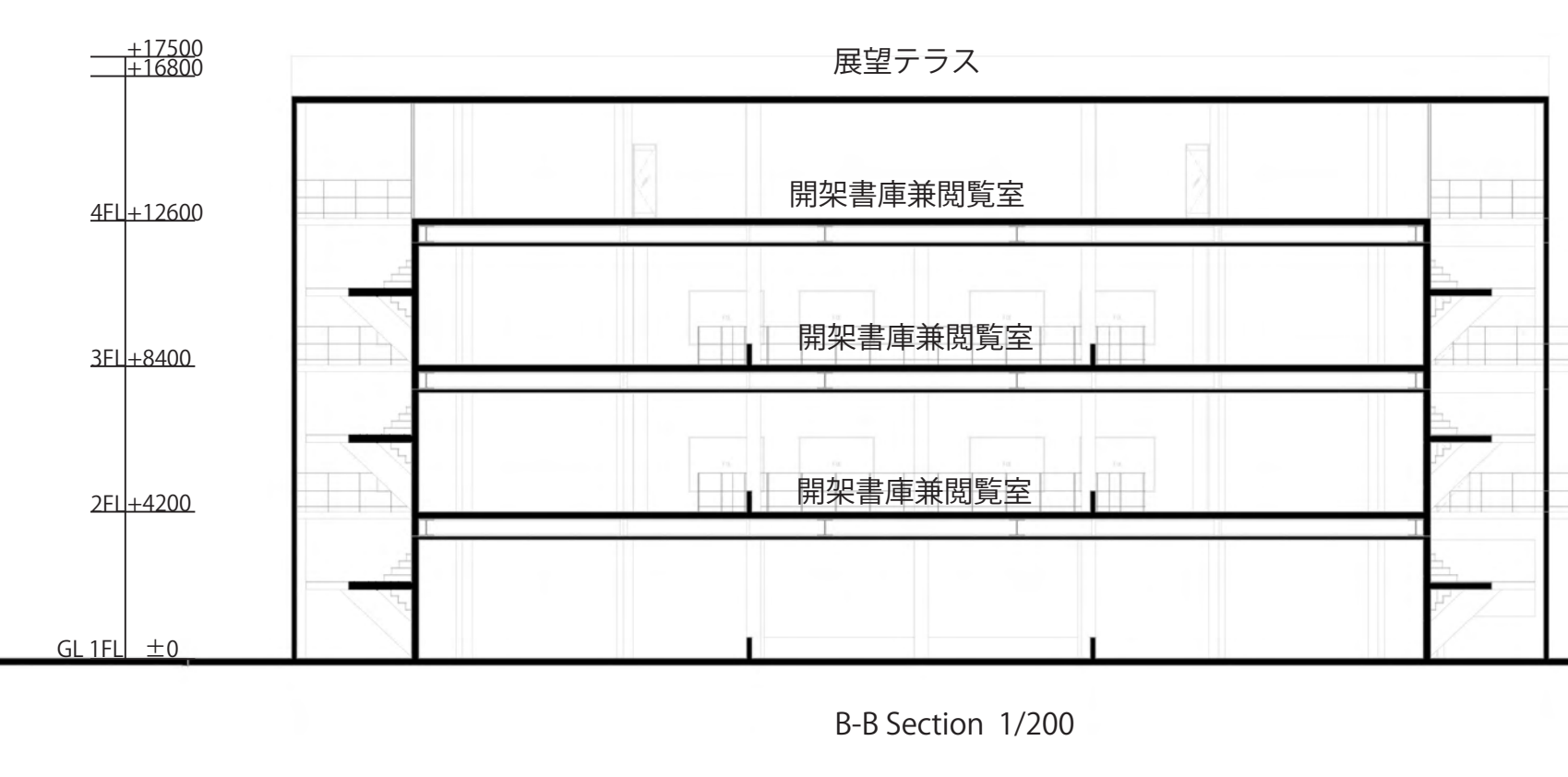
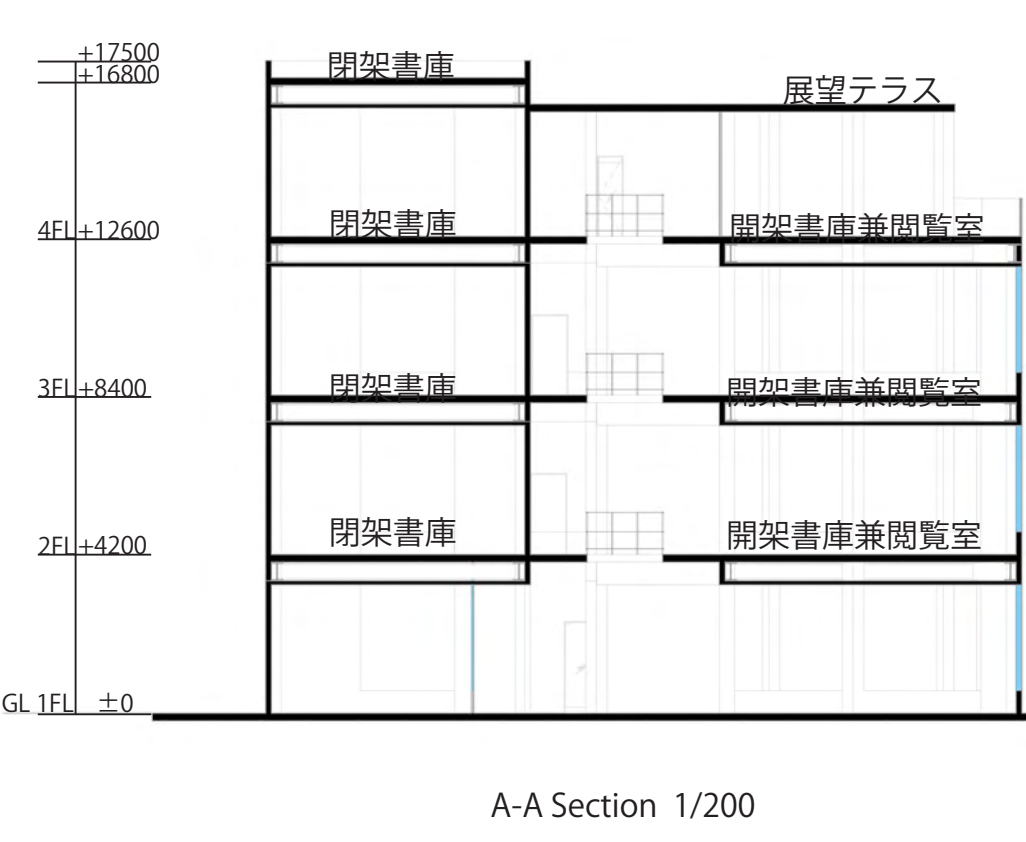
イメージベース：閲覧室カウンター周り



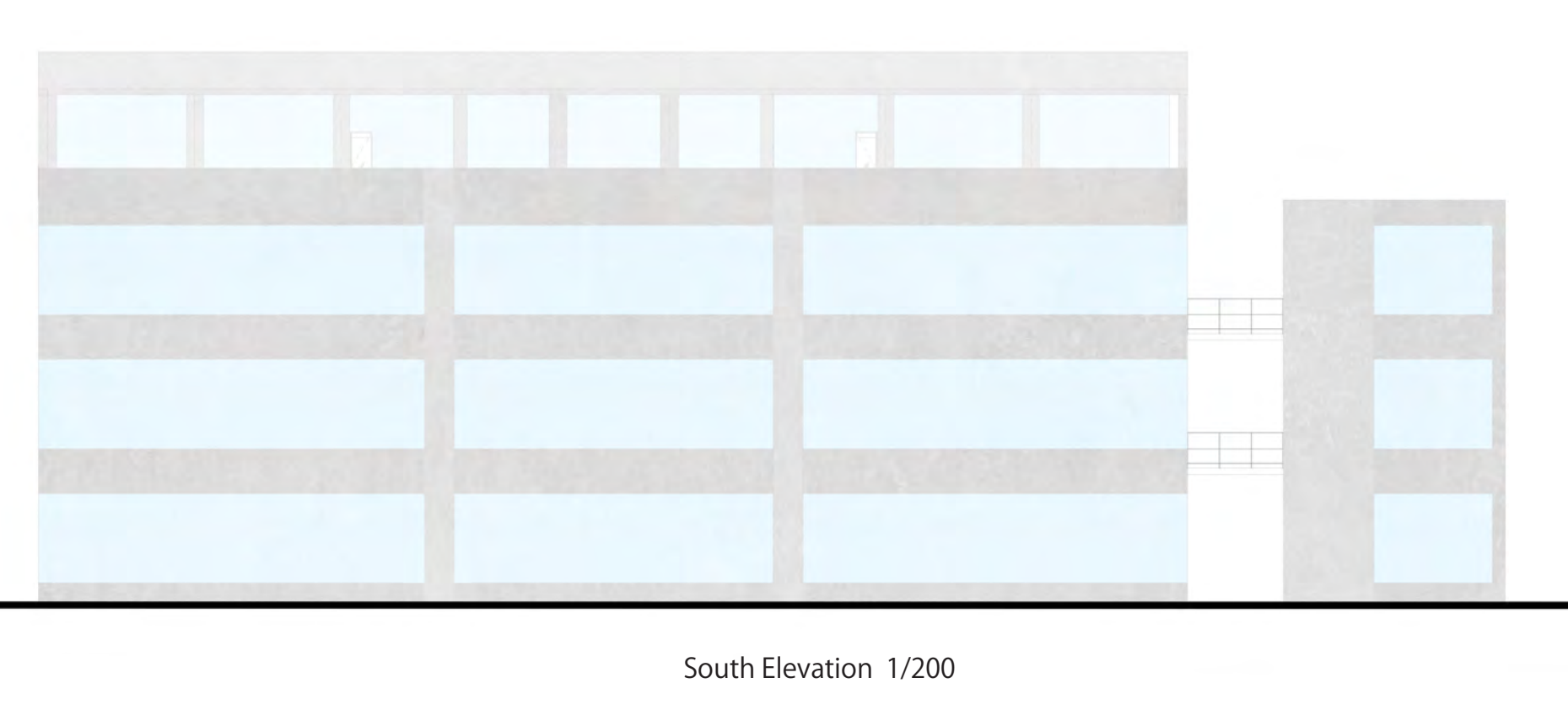
イメージベース：閲覧室



イメージベース：外観



East Elevation 1/200



South Elevation 1/200